

よ 読み札 ふだ

ひやく にん いっ しゅ
百人一首かるた

A4サイズの厚めの紙に
プリントするのが
おすすめだよ!

合計7ページあるから
注意してね!

ふだい ちらん
百人一首読み札一覧

春過ぎて
夏来にけらし
白妙の
衣ほすてふ
天の香山

秋の田の
かりほの庵の
苔を粗み
わが衣手は
露にぬれつつ

田子の浦に
うち出でて見れば
白妙の
富士の高嶺に
雪は降りつつ

あしびきの
山鳥の尾の
しだり尾の
長々し夜を
ひとりかも寝む

かささぎの
渡る橋に
置く霜の
白きを見れば
夜ぞ更けにける

奥山に
紅葉踏み分け
鳴く鹿の
声聞くとときぞ
秋はかなしき

天の原
ふりさけ見れば
春日なる
三笠の山に
出でし月かも

我が庵は
都のたつみ
しかぞ住む
世をうち山と
人はいふなり

これやこの
行くも帰るも
別れては
知るも知らぬも
逢坂の関

花の色は
移りにけりな
いたづらに
我が身世にふる
ながめせしまに

わたの原
八十島かけて
こぎ出でぬと
人には告げよ
海人の釣舟

天つ風
雲の通ひ路
吹きとぢよ
をとめの姿
しばしとどめむ

筑波嶺の
峰より落つる
みなの川
恋ぞつもりて
淵となりぬる

ちはやぶる
神代も聞かず
龍田川
からくれなゐに
水くくるとは

今来むと
いひしばかりに
長月の
有明の月を
待ち出でつるかな

名にしおはば
逢坂山の
さねかづら
人に知られで
くるよしもかな

陸奥の
しのぶもぢずり
誰ゆゑに
乱れそめにし
我ならなくに

住の江の
岸による波
よるさへや
夢の通ひ路
人目よくらむ

吹くからに
秋の草木の
しをるれば
むべ山風を
あらしといふらむ

小倉山
峰のもみぢ葉
心あらば
今ひとたびの
みゆき待たなむ

君がため
春の野に出でて
若菜つむ
わが衣手に
雪はふりつつ

難波渇
みじかき葦の
ふしの間も
逢はでこの世を
過ぐしてよとや

月見れば
千々に物こそ
かなしけれ
わが身ひとつの
秋にはあらねど

みかの原
わきて流るる
いづみ川
いつ見きとてか
恋しかるらむ

立ち別れ
いなばの山の
峰に生ふる
まつとし聞かば
今歸り来む

わびぬれば
今はた同じ
難波なる
みをつくしても
逢はむとぞ思ふ

このたびは
幣もとりあへず
手向山
もみぢの錦
神のまにまに

山里は
冬ぞさびしさ
まさりける
人目も草も
かれぬと思へば

心あてに
折らばや折らむ
初霜の
置きまどはせる
白菊の花

ひさかたの
光のどけき
春の日に
しづ心なく
花の散るらむ

白露に
風の吹きしく
秋の野は
つらぬきとめぬ
玉ぞ散りける

恋すてふ
わが名はまだき
立ちにけり
人知れずこそ
思ひそめしか

有明の
つれなく見えし
別れより
あかつきばかり
憂きものはなし

誰をかも
知る人にせむ
高砂の
松も昔の
友ならなくに

忘らるる
身をば思はず
誓ひてし
人の命の
惜しくもあるかな

契りきな
かたみに袖を
しほりつつ
末の松山
波越さじとは

朝ぼらけ
有明の月と
見るまでに
吉野の里に
降れる白雪

人はいさ
心も知らず
ふるさと
花ぞ昔の
香にほひける

浅茅生の
小野の篠原
忍ぶれど
あまりてなどか
人の恋しき

逢ひ見ての
のちの心に
くらぶれば
昔は物を
思はざりけり

山川に
風のかけたる
しからみは
流れもあへぬ
もみぢなりけり

夏の夜は
まだ宵ながら
明けぬるを
雲のいづこに
月やどるらむ

忍ぶれど
色に出でにけり
我が恋は
物や思ふと
人の問ふまで

逢ふことの
絶えてしなくは
なかなか
人をも身をも
恨みざらまし

あはれとも
言ふべき人は
思ほえて
身のいたづらに
なりぬべきかな

みかきもり
衛士のたく火の
夜は燃え
昼は消えつつ
ものをこそ思へ

嘆きつつ
ひとりぬる夜の
明くる間は
いかに久しき
ものとかは知る

めぐり逢ひて
見しやそれとも
わかぬまに
雲隠れにし
夜半の月かな

由良の門を
渡る舟人
かぢを絶え
行くへも知らぬ
恋の道かな

君がため
惜しからざりし
命さへ
長くもかなと
思ひけるかな

忘れじの
行く末までは
かたければ
今日を限りの
命ともがな

有馬山
猪名の笹原
風吹けば
いでそよ人を
忘れやはする

八重葎
茂れる宿の
さびしきに
人こそ見えね
秋は来にけり

かくとだに
えやはいぶきの
さしも草
さしも知らじな
燃ゆる思ひを

滝の音は
絶えて久しく
なりぬれど
名こそ流れて
なほ聞こえけれ

やすらはで
寝なましものを
小夜更けて
かたぶくまでの
月を見しかな

風をいたみ
岩うつ波の
おのれのみ
くだけて物を
思ふころかな

明けぬれば
暮るものとは
知りながら
なほうらめしき
朝ぼらけかな

あらざらむ
この世のほかの
思ひ出でに
いまひとたびの
逢ふこともがな

大江山
いく野の道の
遠ければ
まだふみも見ず
天の橋立

いにしへの
奈良の都の
八重桜
けふ九重に
にほひぬるかな

恨みわび
ほさぬ袖だに
あるものを
恋に朽ちなむ
名こそ惜しけれ

嵐吹く
三室の山の
もみぢ葉は
龍田の川の
錦なりけり

高砂の
尾の上の桜
咲きにけり
外山の霞
立たずもあらなむ

夜をこめて
鳥のそら音は
はかるとも
よに逢坂の
関はゆるさじ

もろともに
あはれと思へ
山桜
花よりほかに
知る人もなし

さびしさに
宿を立ち出でて
ながむれば
いづくも同じ
秋の夕暮れ

憂かりける
人を初瀬の
山おろしよ
はげしかれとは
祈らぬものを

今はただ
思ひ絶えなむ
とばかりを
人づてならで
いふよしもがな

春の夜の
夢ばかりなる
手枕に
かひなく立たむ
名こそ惜しけれ

夕されば
門田の稲葉
おとづれて
葦のまろやに
秋風ぞ吹く

契りおきし
させもが露を
命にて
あはれ今年の
秋もいぬめり

朝ぼらけ
宇治の川霧
たえだえに
あらはれわたる
瀬々の網代木

心にも
あらでうき世に
ながらへば
恋しかるべき
夜半の月かな

音に聞く
高師の浜の
あだ波は
かけじや袖の
ぬれもこそすれ

わたの原
こぎ出でてみれば
ひさかたの
雲居にまがふ
沖つ白波

瀨をはやみ
滝川の
われても末に
あはむとぞ思ふ

ほととぎす
鳴きつる方を
ながむれば
ただ有明の
月ぞ残れる

夜もすがら
物思ふころは
明けやらで
閨のひまさへ
つれなかりけり

玉の緒よ
絶えなば絶えね
ながらば
忍ぶることの
弱りもぞする

淡路島
かよふ千鳥の
鳴く声に
幾夜寝ざめぬ
須磨の関守

思ひわび
さても命は
あるものを
憂きにたへぬは
涙なりけり

嘆けとて
月やは物を
思はする
かこち顔なる
わが涙かな

見せばやな
雄島のあまの
袖だにも
ぬれにぞぬれし
色はかはらず

秋風に
たなびく雲の
絶え間より
もれ出づる月の
影のさやけさ

世の中よ
道こそなけれ
思ひ入る
山の奥にも
鹿ぞ鳴くなる

村雨の
露もまだひぬ
まきの葉に
霧立ちのぼる
秋の夕暮れ

きりぎりす
鳴くや霜夜の
さむしるに
衣かたしき
ひとりかも寝む

長からむ
心も知らず
黒髪の
乱れてけさは
物をこそ思へ

長らへば
またこのころや
しのばれむ
憂しと見し世ぞ
今は恋しき

難波江の
葦のかりねの
ひとよゆゑ
みをつくしてや
恋ひわたるべき

わが袖は
潮干に見えぬ
沖の石の
人こそ知らね
かわく間もなし

世の中は
常にもがもな
渚こぐ
あまの小舟の
綱出かなしも

来ぬ人を
まつほの浦の
夕なぎに
焼くや藻塩の
身もこがれつつ

み吉野の
山の秋風に
さ夜ふけて
ふるさと寒く
衣打つなり

風そよぐ
ならの小川の
夕暮れは
みそぎぞ夏の
しるしなりける

おほけなく
うき世の民に
おほふかな
わが立つ所に
墨染めの袖

人もをし
人も恨めし
あぢきなく
世を思ふゆゑに
物思ふ身は

花さそふ
嵐の庭の
雪ならで
ふりゆくものは
わが身なりけり

もしきや
古き軒端の
しのぶにも
なほあまりある
昔なりけり